灰爪の戊辰戦争

平成元年一月

荒木家光

西山ウ

一、　徳川斉昭（一八〇〇～一八六〇）　江戸時代終わりごろの水戸藩主二十九才で藩主となる。藤田東湖などの優れた人物を用いたり、倹約を勧め、弘道館を建てて学問や武道を奨励するなど、藩の政治を改めることに勤めた。尊皇攘夷（三条実美）を強く唱え、鉄砲隊をつくったり、大砲を造ったりしたため、幕府から疑われ、罰せられたこともある。後、許されてペリーの来航によって難しくなってきた幕府の政治に加わった。条約問題、将軍の跡継ぎ問題で大老井伊直弼と意見が合わず、再び閉じ込めの身となり、安政の大獄、桜田門外のあわただしいなかで亡くなった。

一、　井伊直弼　（一八一五～一八六〇）

江戸時代末期の彦根藩主、大老、幼名鉄之助、ついで鉄三郎、後掃部守。一八五〇（嘉永三年）家を継いだ。それから三年の後、ペリーが浦賀（神奈川県）に来て開国を求め、（阿部正弘）更に一八五六（安政三年）にはアメリカの総領事ハリスが下田に来て、通商条約を結ぶことを求めてきた。世論は開国か攘夷（外国を追い払うこと）かに分かれて沸き立った。また、ちょうどこの頃将軍家定の世継ぎ問題が起こった。こういうとき直弼は推されて、一八五八（安政五年）大老という幕府の最も高い地位に就いた。そして直ちに紀州藩主慶福（家茂）を跡継ぎに決め、更に朝廷の許しを待たないで、ハリスと通商条約を結んだ。世界の動きを知っていた彼はいつまでも鎖国を続けることはできないと考え、はやくから外国と交わろうという開国論を唱えていたからである。然し、この取決めに反対する声は急に大きくなった。そこで直弼は、反対した公家や大名などを罰し、反対運動をした人達を次々に捕らえた。一八五八年から翌年にかけてのこの厳しい取締りを「安政の大獄」という。このため直弼は多くの人から恨みを受け、一八六〇（万延元年）江戸城の桜田門外で水戸藩士に襲われて殺された。

一、水戸の内戦　「魔群の通過」山田風太郎　外

元治元年春、藤田東湖の遺児小四郎が筑波山に志士を集めて、幕府に攘夷の実行をせまるために、示威運動を起こした。これに対して幕府の討伐軍が出動し、かつ水戸藩の佐幕派も協力し、常陸西部で戦が始まった。夏になって、江戸にあった藩主慶篤公が自分の名代として、友藩松平大炊頭頼徳公に家老榊原新左衛門以下一千の兵をつけて、水戸へ派遣し、これをとり鎮めようとした。この松平勢に、矢張り攘夷派ではあるが、藤田小四郎の行動には賛同していなかった水戸藩元家老武田耕雲斉が途中で加わっていっしょに水戸に乗り込もうとした。し

かるに、このとき水戸を押さえていた佐幕派が松平公の入国を拒否したのみか、この藩公名代に鉄砲を打ちかけた。そこで松平公も応戦の止むなきに至り、対抗上那珂湊を軍の基地とした、ここへ藤田小四郎も馳せ加わった。一方佐幕派には幕府軍及び出動を命ぜられた関東諸藩の兵が加わった。その中心人物が水戸藩佐幕派の市川三左衛門、幕府の総大将が田沼玄蕃頭意尊である。こうして夏から秋にかけて、三千の那珂湊連合軍と六万の幕府連合軍との間に那珂湊を中心に今度は常陸東方で戦闘が続けられた。これだけの兵力の差があるにも拘らず両軍は一進一退と言ってもいい戦いであった。ところが九月下旬に至って那珂湊勢が主将と仰いだ松平大炊頭が突如単独で幕府軍に身を投じ、次いで十月下旬にその配下であった榊原新左衛門以下一千名も同様に投降した。投降したのみならず、逆に味方を攻撃しようとした。これで戦争は終わった。残った武田勢、藤田勢は一時は全滅を覚悟したが、自分達が乱臣賊子の汚名を受けたまま死ぬのは残念だ。せめて京へ上って、朝廷と禁裏守衛総督一橋慶喜公に自分達の志を知って貰いたいと望んで残兵八百余人と共に常陸から野州、上州、信濃と上洛の行軍を開始した。　中　略

田中伊蔵は武田耕雲斉の子孫（金次郎）を使い、敵の大将の田沼玄蕃頭の妾と奸党の親玉市川三左衛門の娘を誘拐した。そして二人の女性は武田耕雲斉以下八百余名の西上に同行させられたのである。道中　金次郎、丑之助、源五郎等少年三名が付け人として二名の女性の世話に当たった。　以下は武田源五郎の話。文中私とあるのは源五郎のことである。

十二月五日、蠅帽子峠を越える苦しみのため、私達の頭からは女のことは薄れてしまいました。峠の積雪は四～五尺で、それになお雪は降続いているのです。その行軍の惨苦はもう一一申し上げませぬ。天狗党長征の全コース中最大の苦闘であったとだけ申し上げておきましょう。　その後越前に入りましたが、このあたりは山また山でございます。

笹又峠、湯の尾峠、その他村から村へ行くのには殆どみな山を越えなければならない。しかも大変な風雪の中でございました。その笹又峠には大野藩の藩兵が待ち受けているということでありましたが、我々が接近すると、これまた退却してしまい、それどころか、どうか大野を避けて今庄の方へ行ってくれという哀願とともに多額の金子と食糧を届けて参りました。黒当戸で切羽詰まって殆ど食い尽くした食糧の件は望外にも向こうから一応解決してくれた次第でございます。六日木の本村、七日宝慶寺、八日谷口、九日小倉谷、十日今庄、何処まで行っても背たけに近い雪また雪、まるで白い夢魔と戦っているような日と夜が続きました。「尊皇攘夷」の旗は風に靡くボロとなり、もう　わらじ　は手に入らず、凍傷を防ぐために布きれを巻いた足は、みな泳ぐようでありました。全員の頭から尊皇攘夷など掻き消え、一体何の為に何処へ行こうとしているのか分からなくなり、はては

これは、この世のことでなく、自ら亡者の行進ではあるまいか、と思われてくる程でございました。それで我々は十一日、木の芽峠を越えました。

此処で私はへんてこな心理的体験をしました。木の芽峠は皆様ご存じの通り、昔新田義貞が北国へ落ちて行くとき足利勢に襲われ、兵馬共に風雪の中に凍えて苦闘の限りを尽くしたと「大平記」にある峠ですが、我々も此処で背後から久しぶりに相当数の銃声を聞いたのです。後で分かったところによると、それは福井藩兵でありました。我々は直ちに応戦した。何しろ実に七・八尺という雪の中なので、戦闘らしい戦闘にもならなかったのですが、この鉄砲の応酬で、私は恐怖よりも奇妙な喜びをを覚えた。それは自分達が未だ人間世界と関係があることを確認した嬉しさであったのです。　そして私たちは新保村に到着しました。なんぞ知らん、その直ぐ前面には加賀藩兵以下三万の敵軍が待ち受けていようとは。　坂を上り尽くして村外れに出ると、道はその侭山へ入って行く。その先が木の芽峠なのである。無論海辺には遠く、広野ともまた正反対の山また山に囲まれた木立ちがあり、その間に古い水車が回っているといった風景であったのに、なぜか地の果てのどんづまりといった印象があった。天狗党は此処を逆に峠のほうから雪まみれになって、それこそ雪崩のように、下りてきたというより半死半生で転がり落ちてきたのであります。新保村は焼かれていませんでしたが、此処にも村人の影はありませんでした。然し、僅かに居残っていた老人から直ぐ前面の葉原村まで加賀勢が押し掛けていることを、始めて知ったわけであります。先に我々を待ち受けいた敵は三万と申しましたが、それは天狗党が越前に向かうと知った幕府がそちらの方へ向けた動員を下令した加賀、彦根、桑名、小浜などの藩兵の数で、当面直ぐ前まで来ていたのは加賀藩でございました。然しこれは今までの小藩の敵とは同一に論ぜられない百万石の兵である。新保村の一番大きな屋敷に本陣を構えた耕雲斉は直ぐに使者を送りました。此れ迄同様に我々が此処まで西上してきたいきさつを述べ、決して反乱を企てているのではない。ただ京へ上って我々が攘夷の為に立った志を天朝様か或いは一橋慶喜公へ訴えたい一心からで、何とぞこれから先の通行をお許しに相なりたいと申し込んだのであります。然るに加賀藩の返答は我々はその一橋慶喜公からの御依頼によって出動したものである。既に大津まで出陣された慶喜公の御下知には「天下を騒がす天狗党のやつばら、一人たりとも京へ入らせることは相ならぬ。あえて進んでくるなら討って取れ」とある。よって、それでも罷り通りたいというならば、我等と兵馬の間に相まみえようというのでありました。天狗党は衝撃を受けた。それは加賀の戦意よりも、慶喜様の御指揮によるものだということを知らされたからでございました。「そっちにお化けが出るといって回り道をしたら此方からも同じお化けがバアーと出たようなもんじゃなあ」氷のような沈黙を先ず破ったのは、山国兵部でございました。「だから、言わぬことじゃない」声に笑いを含んでいますが、痛嘆の響きも帯びております。父の耕雲斉は、暗澹たる顔をこわばらせたままでした。慶喜様が我々を討伐する為に中山道へ出て来られると知って、その中山道からそ

れて越前へ廻るというとを考え出したのは耕雲斉でございました。これに対して田丸稲之衛門は「そっちへ廻っても、慶喜様は、またそっちへ廻られるかもしれないではないか」と当然の問いを発した。するとさらにそれに対して父は「我々が何故そっちへ廻ったかということを慶喜様はお考え下さるだろう。そして、そっちへ廻っている間に風向きが変わってくるだろう」と言った。風向きは変わらなかった。田丸稲之衛門の言った通りでした。鵜沼から北方に道を転じて十二日間、あの人間業とも思われない山と雪との苦闘は全く無意味な愚行に過ぎなかったのです。当然覚悟していい事態なのに愚行の結果の消耗ぶりがあまりに徹底的だったゆえに、我々は凍った身体にとどめの冷水を浴びせられたような気がしました。いえ、正確に言えば、私個人より天狗党全般の空気でありますが、ただその中で山国兵部の声だけが続きました。

一此方も始めからの予定の行動だと思えば良い。」　痛嘆の響きは、総大将耕雲斉の愚行への非難というより、自分達の精力の浪費に対してであったのでしょう。然しこの七十一才の老軍師は少なくとも心の精力――精神力に於いては屈伏ということを知らない大変な爺様でございました。「豚一じゃろうが、百万石じゃろうが気にする事はない。邪魔するものは無二無三に踏み破れ。そして天狗党は長州まで大行軍を続けるのじゃ」豚一というのは言うまでもなく慶喜公の渾名です。慶喜公はハイカラ好みで豚を食うのがお好きだったそうで、それと一橋を組み合わせて当時そういう異名をつけたものがあったのです。そこへ、もう夜に入っているのに雪の中を加賀勢からやって来た人がありました。先刻の此方の使者との応答にあきたらず、大胆にも向こうから直接に訪れてきたのです。あの世まで忘れることの出来ない一人となりました。加賀藩馬廻り役、現天狗党討伐軍軍監　永原甚七郎といい、年は五十才前後、実に沈毅な顔と、がっしりした身体をもった人でありました。重ねて此処で応酬し、永原氏は「了解した」と、頷きましたが、此方の陳情もさることながら、彼は惨憺たる天狗党の状態の方にうたれたらしい。帰り際に永原氏は「来て良かった。実は我が方では今夜にも攻撃を開始するところだったが、ちょっと待て、と停めて偵察に来たわけだ」と言って、我々をぎょっとさせました。そしてこの人は、二・三日後天狗党に白米二百俵、濱物十撞、酒二石、錫二千枚その他馬の飼料などを届けさせて来たのでございます。一方で彼は我々の陳情書を既に琵琶湖北岸の海津まで出陣していた慶喜公に取り次いでくれようとした。ところが、これは間に立った督戦の幕府の大監察、小監察（旗本あがりの役人ですが）によって冷たく突っ返されました。のみならず、加賀藩に討伐を命じたはずだが、降伏書とは思えない斯様なものを取り次ぐとは、臆病風に取り付かれたか、と叱責されました。これに対する永原甚七郎の反論書が残っていて、その写しが此処にあります。彼は実情を見るに天狗党はあの地で放っておいても、飢餓の為に衰弱死してしまう有様だと延べ、更に「武田勢が事情此処に至れるをお汲みあげもなく、無惨に討てと後下知は不憫の至りと申すべく候。よくよく処置すれば、百万の軍にも当たるあたら勇士を討伐す。その責誰に帰し申すべきや、加うるに彼等は信義を主として

此かも相暴の振る舞い無きに、突然討ち掛かり候わんこと武門の本意に候わず—
とまで申してくれております。今読んでも私共は彼の同情に感涙を禁じ得ないものであります。加賀藩の言うように、暫く天狗党の出様を見て待つべきか、進んで討伐すべきか・・・・これは、彦根藩など最も強硬だったそうでござりまするが、あちら側でも両論があったらしく、結局一直ちに無条件降伏せよ。然らずんば、十七日攻撃を開始する　ということに決定し、それが天狗党に通告されたのは十六日の夕刻でありました。
十六日の夜、新保村の天狗党の幹部会議で激しい議論が十七日の未明まで囲炉裏を囲んで怒号し、涙さえ流す軍議ーーそれは常陸の大子以来幾度か見た光景ですが、この越前新保村のそれは、今思い出すと、赤い炎が濃い影をつくってゆらめく顔、顔、顔、がもう地獄の相を帯びていたように思われてなりません。

一坪山　正法寺

出雲崎　代官所跡—

その結果決定は耕雲斉に委ねられた。そして耕雲斉は降伏説に軍配を上げたのです。その最後の言葉は、また
も一兵部、矢張り儂は慶喜様にはお手向かいできぬよ」後になって思えば耕雲斉は此処で二度目の愚行ー決定的
な愚行を犯したのです。敵の要望により降伏の使者は武田耕雲斉の孫、武田金次郎が敦賀の本陣、幕府目付へ行
くことになる。こうして十七日から二十四日にかけて天狗党はいくつかの組に分けられて雪中を敦賀に送られま
した。思えば海の見える那珂湊から旅を始め、海の見えない土地ばかり二百余里、六十余日を歩き続けたいわゆ
る「天狗長征」は、最後は捕虜として、この海の見える敦賀で終わりを告げたのでございます。敦賀に送られて
天狗党はご承知のように、本勝寺、本妙寺、長遠寺と三つの寺に分けて預けられましたが、その世話を引受けた
のも加賀藩でございました。例の永原甚七郎が「彦根藩に任せたら大変」と心配して特に願い出、海津にあった
慶喜公がその意味を察し、加賀藩に敬意を表して任されたという話も我々に感涙を流させました。永原氏は我々
を遇するに「義士」をもってし、加賀の侍達にも赤穂浪士を預った元禄の細川家の話を屢々されたそうです。明
くれば元治二年一月二十日のことでございます。三つの寺に謹慎していた天狗党は世話役の藩から衝撃的な事実
を告げられた。田沼玄蕃頭が一昨日十八日上洛し、慶喜公に天狗党の引き渡しを要求しているというのでございま
ます。田沼は慶喜公にこう申し込んだそうです。「天狗党が事を起こしたのは水戸であり、かつ水戸で捕らえた
天狗党も多数あり、又彼等を鎮圧した自分に、その処分に就いての権限がある。権限がある。それと法的に一致
した処置をしなくては、公平を期せられない。何にしても天下の目というものがあるから、自分としては寛大な
方針で臨む積もりである」慶喜公は田沼の要求にも一理あって無下に拒否は出来ず、かつまた寛大な処置を仄め
かされたので、うかと信じたと後に仰せられたようですが、私想像しますに、田沼は右の口上のみならず、今申
したような慶喜公のお立場を見透かして、相当に脅迫的な言辞を弄したのではないかと思われます。それに恐怖
して慶喜公は要するにご自分の保身のために自分を頼って来た天狗党をあっさり売り渡されてしまったのです。
幕府の命令がそうであり、慶喜公が屈伏されてはもう加賀藩もどうすることも出来ない。永原甚七郎自身が本勝
寺の耕雲斉の処へ来て右の次第を告げた。耕雲斉は一仰せの趣かしこまってございます」と平伏し、「さて　旧
臘以来の御親切、しばらくの間ながら三年も生き延びた心地がいたす。子孫のうち一人でも生きてこの世にあら
ば、御恩の万分の一でも報じさせたく存ずるがが、もし一族刑戮の運命に逢うならば、残念ながらそれも叶わず、
せめてあの世からご恩に報いたく存ずる」と言った。永原甚七郎以下加賀の侍達は胸を衝かれた表情で一語もご
ざりませなんだ。彼等がうなだれて去った後、私の兄の武田魁介が

梅鉢の花の匂に浮かされて我が身の果てを知らぬつたなさ

天狗党が加賀藩の保護から引き離されて彦根藩、福井藩、小浜藩の手に引き渡されたのが一月二十九日のことで、
御承知の此の敦賀の浜手町の蓮蔵でした。

・・・・中略・・・・

二月一日　田沼は市中の永覚寺に白州を設け、即決裁判により、
斬罪を宣告された者　　耕雲斉以下　三百五十二人
遠　島　　百十一人
水戸藩引き渡し　　百三十人
その余の者追放

武田金次郎十八才、私武田源五郎十六才は九州五島へ遠島と決まりました。　その後慶応四年一月八浜藩預りの天狗党に「かねて勤皇の志これある趣、天聴に達じ候に付き」近く召し出される。二月上洛の命が下りました。金次郎は勇躍、同じくこれまで三年間拘禁され、生き残っていた七十ほどの天狗残党とともに京へ出立して行きました。そして、岩倉郷へ願書を出した。官軍としてお召し出しは光栄の極みですが、何分にも徳川慶喜公を賊の大将として、追討の軍に加わるのは、臣子の義として忍びない。それより私は水戸へ行って烈公のお志に背いた奸徒どもの掃滅を任といたしとう存ずる。と言って、これに対して岩倉郷はやがて「願いの儀さし許す」と返書を下された。

五月二十一日金次郎は天狗党を率いて遂に水戸に乗り込んだ。然し市川三左衛門はいなかった。これは逃亡していたのです。幕府の倒壊は諸生派にとって、我々以上の驚天動地の出来事だったでございましょう。無論水戸では混乱が起こりました。それを圧したのはまた市川でございました。その後市川は諸生党の領袖鈴木石見守や、朝比奈弥太郎、佐藤図書、大森弥左衛門等重臣と共に手勢五百人を率いて水戸から奥州へ脱出して行きました。三月十日、五百の手兵を率いて水戸を脱出した市川部隊は北上して会津に入り、会津藩の指図で越後へ出、四月八日新潟に入っておりました。そして五月から始まった北越戦争で長岡藩の河井継之助との協同作戦に参加しました。以後灰爪村で五十人、与板村十二人
市之坪村十四人、椎谷村で三人、宮川村で四人という戦死者を出しました。諸生党の幹部佐藤図書も戦病死しております。東軍の中に水戸兵がいる。而も恐ろしく戦闘精神旺盛な部隊だ。その知らせが水戸にもたらされ、武田金次郎が目指す、真の仇敵の所在を知って、勇躍して出動しました。下野、上野、信濃を経て、勢いよく越後へ進みました。二月の間武田軍はひたすら市川勢を求めて戦塵の中を駈けずり廻ったが、遂に出会うことができなかった。九月二十二日会津は遂に落城しました。従軍していた彼の息子の主計も戦死しました。その頃西軍中に水戸隊が参加しているという噂を聞き、それなら水戸も手薄のはずだ。と再び水戸を乗っ取り、徳川護持の城とするのだ。そして市川勢はなんと会津から野州に下って、一路水戸へ狂熱の帰還を開始したのです。これには全く皆が虚を衝かれました。市川勢は疾風の如く進撃して、十月一日には水戸に到着いたしました。

市川勢水戸へ向かうの情報を武田金次郎が聞いて躍り上がって追跡にかかったがもう間に合わなかった。思えば天狗党の長征は二月ですが、市川勢は国をでてから半年以上です。天狗党ほどの難行軍はやらなかったのかもしれないが、本国とは断絶したまま、圧倒的な西軍を相手に他国で転戦する。敵のみならず味方の長岡藩、会津藩も到底これを優遇する余裕は無いから、ときには却って厄介者扱いをされ、邪魔にされたことでしょう。それにもめげず、なお戦意を失わない。天狗党は最後には疲労困憊して降参してしまいましたが、諸生党は真一文字に本国へ馳せ帰って来た。この根性は敵ながら天晴れというしかありません。さて市川勢はその日から水戸城攻撃に移った。実は市川勢水戸へ向かうという知らせは、会津方面から伝令によって一日早く水戸に伝えられていたのです。何と言っても鉄砲その他武器を携帯した部隊なので、伝令の方が早く着いたのでしょうが、僅か1日の違いとは、いかに市川勢の進撃が猛烈であったか想像されるというものです。この僅か一日違いが市川勢の命取りになりました。急報により、水戸城の留守部隊は、近郷の侍を駆り集めて待っていたのです。しかし市川勢はそれでも城内に突入し、また弘道館を占領しました。一時は全城乗っ取られるかと思われるほどの血戦でありました。翌二日にはもうどちらも戦えないほど疲労しきっていました。而も市川勢には補給が無いのに比べて城方には召集された郷士達が続々と駆け集まって来る。さしもの市川勢も挫折せざるを得なかった。二日夜から三日朝にかけて、市川部隊は城から南に撤退を始めました。そして十月三日血のような落日の頃、追撃の水戸兵に上総の八日市場で包囲されてしまったのです。此処で市川の次男安三郎や、三左衛門と並ぶ朝比奈弥太郎やその子も戦死し、市川勢はほぼ全滅した。しかるに市川三左衛門の勇猛さはまさに鬼神のごとく、彼は長槍を振って奮戦し、ただ彼一人と言って良いほどの血路を開いて逃れ去ったのです。武田金次郎が一隊を率いて狂気のごとく会津から駈け戻って来たのは、それから数日の後でありました。以上武田耕雲斉の子武田源五郎のお話をもとに申し述べました。

一、徳川斉昭　天狗党の登用　水戸藩主
一、井伊大老の安政大獄　彦根藩主
一、桜田門にて井伊大老暗殺される　水戸浪士
一、天狗党加賀藩に降伏
一、天狗党敦賀にて斬罪　三百五十二人
一、この処刑を引き受けたのが彦根藩士である

これからは当時の攻撃側西軍加州藩の古文状、会津藩井上哲作の戦闘報告書、別山村庄屋のとった行動の言い伝え

慶応四年五月十四日　灰爪村の戦い

（太陽暦では七月三日）

市川三左衛門以下諸生党（東軍）は出雲崎代官所を占領して本隊を置き、市之坪正法寺を本陣となし、別山村（薬師峠）の惣左衛門、惣八、仁兵衛此の三ヶ所に会津、水戸勢八十名斗り、灰爪村百五十人斗り屯集、十弐日より陣地を構築しあり。各戸は戸を明け放し、山間に隠れて戦いの終わるのを待った。村には若干の老人が居ったといい伝いあり。別山の庄屋はこんなことが長く続いたら困ると、十三日雨の中を蓑・笠で川づたいに西軍本陣のある坂田村円満寺へ東軍の配置状況等通報した。本陣にいた高田藩は直に妙法寺の西軍本隊に報告出撃を要請する。十四日未明　長州一ヶ小隊、加州藩一ヶ小隊、水野徳三郎は大砲一門を持って出撃、椎谷藩の佐藤喜左衛門の案内にて、田沢村、尾之内村境より大砲を連発し、歩兵部隊は灰爪村水戸勢陣地に切り込み、水戸勢の戦死者五十名ばかり、西軍の猛攻に水戸勢は後退を余儀無くされ、出雲崎の本隊に合流すべく、此の地を去る。雨中大変な戦いであった。村々はちょうど田植の真っ最中と聞く。一方薬師峠では井上哲作が一ヶ分隊で雨中守備して、他は山下の村で待機中、十四日未明宮本村方面より攻撃を受け、井上は山下に応援の伝令を飛ばしたが応援来らず、止む無く山背づたいに後退し、やっとのことで市之坪本陣に合流する。別山村荒谷某家入り口には東軍の隠れ家と思い、西軍が打ち込んだ弾の痕あり。内にいた侍が手傷を負い、内越で西軍の兵と激闘の末に首を斬られしと聞く。この侍の家来が難をのがれての報告に、縁故の人であろうか、明治十年頃水戸からはるばる訪れて首が埋められた処へ、石工に頼んで墓を建てた人があったと聞き、現地を調査せるに、杉林の中に、苔むして現存せり。

だいぶ長くなりましたが、此の辺で終わりにします。水戸藩の内紛が越後の此の地まで無駄な苦労をした。移り変わりの激しかった当時の世の中にに生を受けた人々の生々しい史実です。

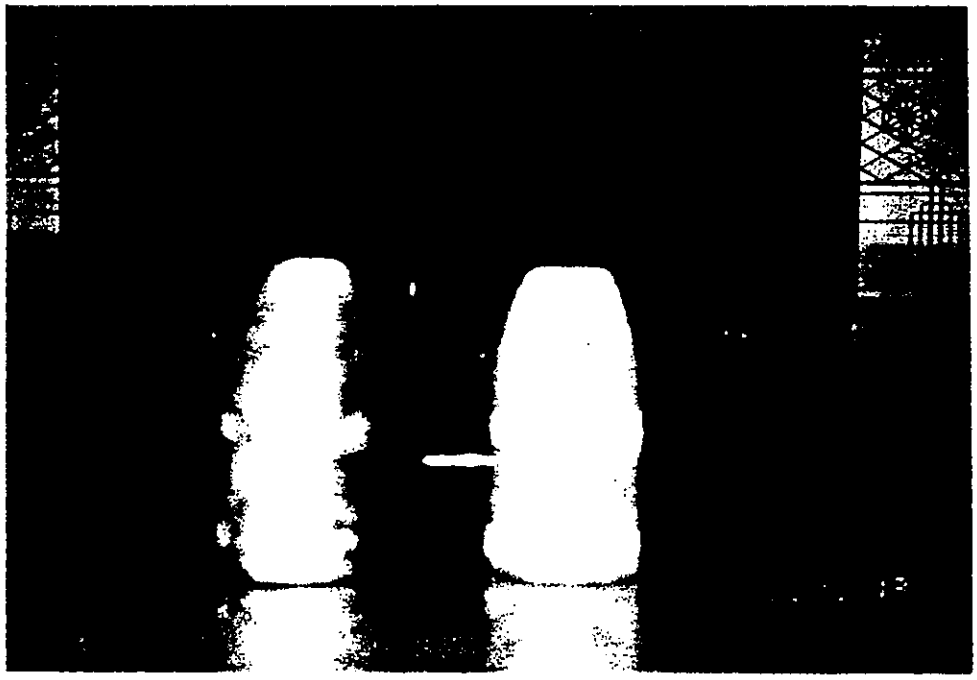
参考文献

一、学習人名事典
一、武田源五郎の話　魔群の通過
一、天狗党の争乱　稲田秀男
一、石川県立金沢図書館より古文書

一、復古外記　北陸道戦記
一、別山校百年史
一、別山古老の伝承
一、西山町町史
一、出雲崎編年史

平成元年一月十五日　西山町灰爪　荒木家光　記

快樂



21